

発願者日置黙仙禅師畧伝記

佐瀬道淳(秋葉総本殿可睡齋齋主)

郷土の誇る一代の英傑日置黙仙禅師について二度、三度尊崇・鑽仰のため囑を受けては筆を執ってきた。同郷にして且つまた当可睡齋の大先達とは申しながらも、礼を失すること甚大なるを恥じ、礼を欠くこと多きを畏れ更にはまた摸象の轍を踏まんことを恐れながらも筆を執った。然も今一つ、人は他を計らんとするも自らの高さしか計れないともいう。それでも書かねばならないことは全く以て無礼千万この上ないことである。

だからせめて今まで余り書いてこなかった所にスポットを当て書かせていただくこととする。

豪胆で人情味あふれるお人柄

禅師に一度接すれば、人は皆禅師の信者となり、傾倒おくあたわざる人となる。信念の人であり、発願したものは必ず貫徹された。

主な大事業として、安政の大地震からの可睡齋の復旧、活人剣、護国塔、奥の院、経蔵等の発願、更には、京都誕生寺、名古屋日泰寺（覚王山）ガンダーラ式仏舎利塔、大船観音発願、また、開山されたお寺も国内外に12ヶ寺もある。

日置禅師は弘化4年（1847）に、鳥取県東伯郡北栄町島にお生まれになった。分家とはいえ上米5千俵預金20万という驚異に価する豪農であった。

禅師の揺籃期 まことに霊山雄峰の下に聖者の出でざるはなし、また高山秀麗は偉傑を生むのである。西に大山ありそれに連なる中国山脈ありで、人格形成に少なからず禅師は影響を受けておられる。

今一つは、厳格熱涙の父の存在である。 弟の夭折は兄禅師に深い無常観を抱かしめた。このことと、鳥取市の景福寺の戒会に、父に連れられてお参りしたことが、禅師に出家の願望を起させたのである。父の反対を押し切って12歳の時であったが、遂に出家を果たす。然し、ある時修行の辛さに負け親元に逃げ帰ってしまったのである。

原因は、一つ年上の兄弟子に何彼につけていじめられ、そのことに耐えられず、遂に出家を止めて自家に帰ろうと、6里の道を（24キロ）歩いた。12歳の子供では自然な成り行きともいえるが、厳格な日置家ではそう簡単なことでは無かった。



実家に帰り着いた時には、陽の暮れ方であったという。母は大変喜んで、さぞお腹もすいていることであろう、先ず夕飯をといわれ、やれ嬉しやと正に箸を取ろうとした時、父が帰って来て「小僧何しに来たか」というのが最初の言葉であった。黙仙はこの詰問に震え上がって黙っていると「出戻り小僧は家に入れることは出来ない」と大喝一声。母が代わって大略の事情を取り次いでくれたが、それを聞いた父は益々怒り出し「汝は自ら望んで出家したのではないか、俺は汝の今日あるを見抜いていたから、容易に許さなかったのであるぞ、自分の強情で一旦出家したものが、再び実家に帰るとは不都合千万。出戻り坊主は我が家の敷居を跨がすことは相成らぬ、況んや、ご飯など食べさすことは罷り成らぬ。お師匠さんの留守中に兄弟喧嘩したからとて出戻ってくるような薄志弱行の者は将来の望みも無い。自分よりも上の者と喧嘩をするような不遜な者は他日出世する望みも無い。人として一事を為し遂げ得

ないものは万事に於てもその通りである。子として親に恥をかかせ家名を傷つけるような不孝者は寸時もここに置くこと相成らん、若し悪かったと気がついたなら、これからすぐ帰るがよい。若し帰らなければご飯も食べさすことは出来ん」というのである。そこで漸やく帰る決心をし、箸を取ることが出来た。

12歳の少年が、再び夜の6里の道を歩いて帰らなければならないのである、帰り着いた時には朝のお勤めの最中であった。

この厳父の折檻は、後の禅師のすべてを決定付けた物語である。今はこんな父の愛情はすっかり姿を消してしまった。その分、凡ては軟弱になってしまった。



物怖じしない堂々の大人の風格、一度人に接すれば、人は皆信服

せずには居られなかった禅師、さりとして威圧的なお顔でもなく、どちらかという、まるやかで慈愛に満ちたおおらかなお顔であり、信念の人であったと同時に、持って生まれた福分の人一倍豊かな方であった。そうした福分がお顔からもお体からも溢れ出ていたからこそ初対面の通りすがりと思えるような人までが、それでは私をご寄付させていただきますとなったのである。

漸く解けた禅師の揮毫「世界平和目出度い」の真意

可睡齋の宝物館に「世界平和 目出度い 目出度い」という掛け軸が展示されている。

日置禅師の伝記を読み返すまでは、その真意がよく分らなかったが、今になってみると、日置禅師がいかに世界平和を希求されていたのかが、よく分かる言葉である。

それは、後に、第一次世界大戦が一日も早く終結することを願って、サンフランシスコで世界仏教徒大会が開かれた折り、日本仏教界の代表として時の米大統領ウイルソンに決議文を持参した経緯があっただけに、戦争終結と国際連盟の設立の報に心から快哉を叫ばれたものであるという一文を伝記の中に発見したからである。

然しこの書をお書きになった5ヶ月後に、禅師は御親化先の信州の養光寺で御遷化になっている。

大正9年の秋、今ならまだ働き盛りともいえる74歳であった。

(参考 日置黙仙禅師伝)